



座」「文化講演会」などの地道な活動も多岐にわたっています。そのほか、好評を得ている「おおとり号」は幼児から大人向けまで様々な本や紙芝居をいっぱい積み込んで市内五十六か所のステーションを巡回しています。これが導入されたのは、図書館を利用できない人々にも公平な市民サービスを行いたいということからでした。また、余暇時間の増加に対応するため今年度から土曜日の午後も開館するようにしたところ、週で一番入館者が多いと聞いて、納得するものがありました。ほかに、行政の広域化に伴って市外からの通勤・通学者が多くなったので、市民と同じく市外のかたにも館外貸し出しをしており、好評のとどでした。さらに、読書の輪を広

げる意味で五人以上の申し込みがあれば、団体貸し出しも行っているとのことでした。

四、将来計画

計画中のコンピューターを導入すると、職員の作業効率や利用者の利便性が格段に上がるそうです。それから、老朽化が進む花矢図書館を新築する構想があり、中央図書館、花矢図書館、おおとり号によってより充実したサービスが可能になるとのことでした。次に、年々増える蔵書の管理のために、従来の三倍の本を収納できる電動書架も検討中とのことでした。県重要文化財に指定されている菅江真澄の著作集のCD-ROM化や新聞のマイクロフィルム化も進ん



開架書庫には50年前の新聞も保管されています

でいますし、郷土出身の思想家である安藤昌益関係の資料収集にも力を入れていました。ほかに秋田県や大館関係の資料集めにも取り組んでいるとのことでした。

五、終わりに

今年、二〇〇〇年は『子ども読書年』で、五月五日には東京の上野に「国際子ども図書館」が開館します。最近言われている、中・高校生の読書離れをどう食い止めるか、これは図書館だけでなく、市民の一人ひとりが考えなければならぬことです。テレビの操作は教えなくても子どもは覚えてしまいます。しかし、読書の習慣は親や大人がきちんと教えることによって身につけてきます。想像力を養うこともできます。図書館にはレファレンスサービス（参考



近藤リポーターも早速貸し出し登録を

業務) もあります。研究調査やわからないことなどについて、専門の立場で調べ、探してくれることも知りました。利用方法さえわかれば図書館は大変便利なところだと改めて気付かされました。私たちの書齋としてもっと図書館を利用すべきだと思い、私も早速貸し出しカードを作ってもらいました。インタビュアが終わって、掃除の行き届いた館内を案内していただきました。一階の閲覧室は大きな窓ガラスから初冬の明るい光が差し込み、静かながら暖かな感じがしました。中央のコーナーでは三三五五、市民の方々が座って読書していましたし、二階の参考図書室では、高校生たちが近づいた期末試験に向けて勉強している姿が目につきました。彼らの邪魔にならないようにしながら帰路につきましました。